

不登校経験について「語らない」ということ

—フリースクールからみる不登校生の実践形成—

佐川佳之（一橋大学大学院）

社会構築主義的な不登校研究がすでに明らかにしているように、不登校という生徒が学校に行かない現象は、それを説明しようと試みる多様な人々の語りやクレームが交錯していく中で現れている。[朝倉 1995]日本においては、不登校を病理的なものとして捉えるか、あるいは非病理的なものとして捉えるかといった、病理と脱病理の語りのせめぎあいにおいてその現象が成立している。[Yamazaki 1996]そうした様々な語りが交錯する状況において、どのように不登校の当事者の語りや振舞いは他者や環境との相互作用の中で社会的に構成されていくのだろうか。そして当事者は自らの不登校経験についてどのように語るのか（あるいは語らないのか）。

社会的・文化的現象として不登校を分析する社会学的研究は、原因論や言説分析の視点からの分析を主としてきた。それは、大規模なアンケート調査によるマクロな分析[森田 1991]や、東京シューレなどの特定の場における不登校経験の語りの分析から不登校経験とその社会的コンテクストを明らかにするもの[朝倉 *ibid.*; 北山 1999]がほとんどである。従来の研究は、社会運動的文脈などでの当事者の不登校経験の語りを対象とし、しばしば学校教育と対立する主体として不登校生を捉える傾向にあった。しかし例えば心理療法の場では、必ずしも不登校経験の語りは重視されず、クライアントの不登校生が自らの経験を語るわけではない。すなわち子どもは言語によって自らの経験を再構成することが難しいという認識から、非言語的心理療法がしばしば採用されるという。[cf. 菅ほか 2000]こうした自らの経験について語らない不登校生を、先行研究から推測し、脱学校的な主体として解釈するのは難しい。不登校生をめぐる臨床心理学的知が社会的に拡大する状況においては、不登校経験の語りのみならず、非言語的な側面も分析の対象に含める必要があるのではないだろうか。

そこで本発表は、特に不登校経験の語りが生成

する／しない社会的条件に注目し、こうした場の1つとしてフリースクールを事例として取り上げる。具体的には①これまで不登校という行為に対して人々はどのような説明をし、不登校現象が構成されているか、②フリースクールによって不登校理解はどのような違いがあるのか、③それぞれの場所における相互行為において不登校生はどのように経験を語るのか／語らないのか、④ミクロな場での不登校理解と不登校をめぐるマクロレベルの諸言説との関係性といった論点を考察する。その上で不登校研究の展望についても言及したいと考える。

本稿は、東京シューレ（以下 TS）とフリースクール A（以下 FA）の2つのフリースクールを事例に以上の論点を考察していく。前者は不登校を非病理的に理解し、他方で後者は心理学的に捉えている。これらの理解の異なるフリースクールを比較分析することで、先行研究が見逃していた不登校生がおかれている多様な社会関係を明らかにできると考える。本稿では、TS について朝倉 [*ibid.*]のエスノグラフィーや東京シューレの出版物を資料として用いることにする。FA に関しては、2002.7 から 2003.10 にかけて私が行ったフィールドワークで得た資料を用い考察する。

朝倉のエスノグラフィーが示しているように、TS には、アンケートや一般の人々を対象にした見学会など不登校経験について語る機会が数多く設けられている。TS は、「不登校は病気ではない」、「学校に行かない生き方もある」といった思想に基づいて、ミーティングや外部の人々を対象にした見学会、出版活動、アンケート調査を行なっている。すなわち不登校経験を問い、生徒は自らの不登校経験について語ることが規範化されているのである。TS の新参の生徒は「学校に行けないもの」として自己否定的に語るが、TS への参加を通じた他者との交渉の結果、「不登校をしてよかった」、「学校に行かないことを選ぶ」と語るようになる。つまり、こうした語り方は、不登校の再解

釈を試みる社会運動を背景にした生徒／スタッフの相互行為の所産なのである。

他方で、FA は精神科医や臨床心理士との結びつきが強く、生徒を障害概念 (LD、ADHD など) で捉え個々人に応じた心理療法を実践するなど心理学的知識で不登校を理解している。TS とは対照的に、不登校経験を問うことが生徒を精神的に追い詰めるという認識から、恣意的に問いを彼らに向けないことを方針としている。ここでは生徒に経験を語らせることがネガティブな行為として認識されているのである。ただし生徒が悩みなどを特定のスタッフに相談することがあるが、その内容は守秘義務として他の生徒やスタッフに伝えてはならないとされている。すなわち個人的な事情は「秘密」として FA に関わる人々の間で共有されており、日常的に語り合うことはないのである。日常においては、生徒がパソコンやゲーム、スポーツなどを通じて他の生徒やスタッフと交渉し、フリースクールに馴染んでいく過程が観察できる。スタッフは定着していく生徒に対して「表情がよくなった」、「体が動くようになっている」といった語りで解釈する。FA に特徴的なのは、フリースクールに参加することが治療的意味合いを持っていることにある。生徒は、このような状況において、単に不登校経験について語らないのではなく、語ることを求めないようなコミュニケーションパターンを身につけた結果として「語らない」のである。したがって沈黙することは、TS との比較において見えてくるネガティブなものではなく、心理学的な知識を背景にしたスタッフ／生徒の相互行為によって生じるポジティブな現象なのである。

以上で検討を通じて、明らかになったのは、不登校経験の語りと沈黙の状況依存性である。不登校の病理化と脱病理化が進行する社会において、不登校生の行為は様々な規範によって構成されていくのである。本稿はフリースクールのみに注目した分析であり、それゆえ不登校生をめぐる断片的な現実を示したに過ぎない。だが不登校理解の異なるフリースクールの比較を通じて、彼らをめぐる社会関係の多様性は示唆できたのではないだろうか。

北山が指摘しているように、不登校を理解しようと試みる人々は当事者の語りの「真実性」に注目してしまう。それは不登校の問題を理解するには、

当事者の視点を参照することが不可欠であることが共有されているからだという。[北山 ibid.:128] もちろん私は当事者の視点を参照することが不可欠であることに同意する。ただし、不登校の当事者の視点で問題を理解しようとするとき、その考察の対象がその経験の「語り」に偏ってしまうという危うさが残る。先行研究は、主に TS における当時者の語りから権力性や主体性を読み取る分析が主であった。それらは学校教育に対する「抑圧者」や積極的な不登校の「選択者」といった解釈によって、学校教育／不登校といった二分法的な権力関係を定置する傾向にある。しかしこうした不登校の脱病理化や脱学校化の運動の担い手であった TS の分析のみでは、病理と脱病理の語りが交錯する今日の不登校現象の内、後者の側面を強調するにすぎず、様々な規範を生きる彼らの存在を見逃してしまうのではないだろうか。

本稿で試みたのは、不登校生の「居場所」であるフリースクールの比較分析による、不登校生をめぐる社会関係の差異の解明である。特に「語ること」／「語らないこと」というコントラストを明示することによって、本稿では学校教育／不登校といった単純な権力関係に還元できない不登校をめぐる実践の複雑性を示したかった。それぞれのフリースクールによって、規範は様々であり、不登校経験を「語る」規範もあれば、「語らない」規範もある。それらの規範はある知識に依拠するフリースクールのスタッフと生徒との相互行為によって構成されているのである。

本稿で特に注目した、FA に見られる不登校経験について「語らない」ことは一見すると無意味な出来事だが、こうした議論のコンテクストにおいてはじめて意味を成してくる。つまり不登校経験について「語らない」こともスタッフ／当事者の社会的実践の所産であり、沈黙そのものが社会的リアリティであるという意味において重要性を持つと言えるのである。したがって、当事者の経験の語りの無条件な真正化を避けて、不登校をめぐる人々の相互行為に注目し、それを綿密に記述することが、不登校研究に求められると考える。

<附記>

本研究は、財団法人倶進会からの助成（平成 16 年度）に基づき行った。